人文科学とコンピュータ　9－5
（1991. 5. 24）

外像（外国人の見た日本イメージ）のデータベース化

白幡洋三郎　園田英弘　小野芳彦
国際日本文化研究センター

日本文化・日本のイメージを総合的に表すような映像のデータベースを構築しようとしている。映像はその対象が存在する地域（日本／外国）とそれを表現しようとする行為者（日本人・外国人）の組み合わせにより４とおりに分けられるが、外国人→日本という組み合わせにより、日本イメージを網羅的に表現することのできる映像を収集できると考えた。また、それらは日本について書かれた本の中に挿絵として存在するが、それを本から解放して個々に検索対象とすることの有用性について、一つは作成収集の経費面、もう一つは研究上の予想される成果のいくつかの例をあげることで説明している。

A Creation of the Databese "Gaizo" (Japan Images from Foreign Eye)

Yozaburo SHIRAHATA　Hidehiro SONODA　Yoshihiko ONO
International Research Center for Japanese Studies
3-2 Oeyama-cho, Goryo, Nishikyo-ku, Kyoto 610-11, Japan

We begin to create a database of image data all of which represent the culture of Japan and the images of Japan. A whole image data which object are or were in Japan that were taken by foreigners seems to be representing Japan image.

This type of image data can be easily collected from research books of Japan. The database makes them free from the book. We already have gathered older research books of Japan. Therefore, this way of collecting image data is economical. Another advantage is that their retrieval index keys can be easily inputted from the title string written on the books.

Many new researches will be extracted from the database, some examples are discribed.

１．はじめに

国際日本文化研究センター（日文研）は、日本文化の総合的な研究を学際的・国際的に行い、また、その研究活動を国際的に支援する目的で、１９８７年に設立された大学共同利用機関である。日文研における特色ある日本文化の研究の一つとして、計算機を使った映像データベース・サービスを計画し、現在準備作業中（計算機自体は１９９２年１月から稼動の予定）である。本発表では、大量の画像を一貫性・網羅性を保っていかに効率よく収集できるようにするかという点と、計算機への入力を効率よくするにはどうするかという点を中心に論ずる。なお、本発表では、動画か静止画かにかかわらず、イメージを表現する視覚資料を映像と呼ぶことにするが、当面のデータベース化の対象は静止画である。

２．『外像』

２．１　映像の役割と再利用性

一般的に研究を行う上で、テーマに関係する写真、地図、絵はがきなどの映像が簡単に手にはいることは、非常にありがたい。一枚の写真が何百ページに及ぶ本や論文より、対象を鮮やかに描き出すことは、特に文化に関する研究の場合にはしばしばある。写真や地図や絵はがきなどには、はっきりとした事実、もしくはある事実に関わる想像力をかきたてるさまざまなものが込められているからである。

ところが多くの場合、映像は研究遂行のうえで二次的な資料として、これまで取り扱われてきた。もっとも、従来のさまざまな研究論文のなかで、すでに大事な資料として扱われてきた地図や写真がないわけではない。それらは、同時代の状況を視覚的に再現するための重要な資料とされている。研究の成果をもっぱら文字によって公にする現在の学問の世界でも、それらの地図や写真が、論文や図書の挿絵として公表の晴れ舞台に姿を現しているのである。

しかしながら、大学・公共図書館等においては、地図はまだしも、写真・絵はがきでは、図書のような整った分類体系を持ち合わせていないし、また、実際に分類整理されている所もない。さらに、論文や図書の挿絵は、その論文名や図書名があらかじめわかっていなければ、やはり利用することはできない。個々の論文や図書には図表の一覧表が存在することも多いが、それをまとめて検索できるような体制をそなえている図書館等はない。そのせいで、ある対象が写っている写真を図書館で捜そうとしても、ほとんど勘に頼らざるを得ないという大きな障害にぶつかる。

欧米の主要国には、写真ライブラリーやフィルムライブラリーと称する施設があるが、それもまだ十分に満足できるものではない。しかしその程度の活動すら、日本ではまだ見るべきものがないというのが現状である。図書や論文の晴れ舞台に登場する写真や地図は、使われるべくして使われたのではなく、著者の熱意によってたまたま見いだされ、あるいは取り上げられた偶然の結果でしかないのである。映像は、図書と同じ程度に、だれもが容易に利用できるシステムにのっていれば本来はもっともっと利用されるはずのものであろう。

２．２　『外像』の日本イメージ研究での位置づけ

映像は、たとえば写真を例にとってみてもわかるように、記録しようとする眼差し（目）と被写体（対象）との関係が、記録媒体に残されるものだと考えられる。すると日本イメージの研究というテーマを考えた場合、全ての映像は、図１で示されるような４つのカテゴリーに分類できる。

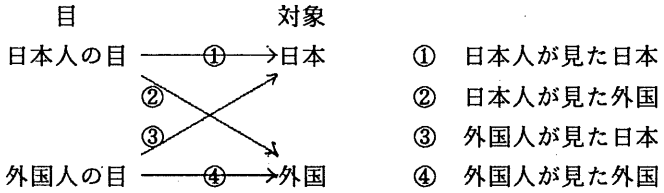


図１　日本イメージのカテゴリー

以上四つのカテゴリーの映像は、すべて日本イメージ研究に用いられる可能性がある。「外国人がみた外国」映像であっても、比較の観点からは資料となりうる。しかし、そこまで広く解釈してしまうと、必要な映像資料の範囲は、存在する限りの全映像だということになってしまう。そうなると、量が膨大で収集上からも、実際の研究支援のための役に立たない。そこで、写されている対象を日本に限定する。すなわちカテゴリーの①と③に絞ってみる。だが、それでもまだ膨大な数にのぼる。とくに「日本人がみた日本」は、各家庭に残されているさまざまな記念写真を考えても膨大な数になることは明らかで、「どのように収集するか」を考えるとき、この点はとくに大きな障害となる。そこで、カテゴリー③の「外国人が見た日本」に注目したい。「外国人がみた日本」には、たとえば

○外国語でかかれた日本研究書の挿絵
○外国人が撮影・収集した写真・ポスター・絵はがき等
○外国人が撮影・編集したフィルム・ビデオ

などが考えられる。このうち「日本イメージ」を総合的に表わしており、量的にもまとまっているものとして外国語でかかれた日本研究書（外書と呼ぶ）の挿絵（これを外像と呼ぶ）を利用することを考えた。以上のような論理をたてたのは以下の理由による。

外国人の日本研究はすでに、日本人の研究に劣らず広い領域にわたっている。日本人の日本研究を上回る成果も現れている。その成果である「外書」が研究分野の各領域をカバーしているように、その挿絵「外像」には日本理解に必要な映像が各領域にわたって選択されている。しかも、文字で伝達するのが困難なものが、映像で補われている。すなわち、外国人の（少なくとも研究者の）日本イメージが、総合的にそこに投影されていると考えられるのである。

異文化理解のための映像、とりわけ写真は欧米人の方がはるかに歴史的経験に富んでいる。たとえば、幕末・明治初期の写真に関しては、日本人が写したものより欧米人が写したものの方が数多く、しかも日本人が所有していない映像も多い。（図2-a「兵庫の仏像」や図2-b「佐竹の庭」は被写体自身が現存せず、貴重なきろくである。）

以上のような観点から「外像」は、日本イメージ研究に必要な映像資料の宝庫だといえよう。

国際日本文化研究センターでは、これまで出版された「外書」の総数をおよそ１５万冊と概

算している。そして挿絵の数は、われわれの調査で一冊当りおよそ４０枚という数字がでた。すなわち「外像」の総数は６００万枚になる。これは膨大な量であるが、理論的には「外書」の収集ができれば「外像」は自動的に集まる。そして膨大な量であるがゆえに縦横に利用するためにはどうしてもコンピュータによるデータベースの構築が避けられない。映像をもとにした「日本イメージ」を研究しようとするとき、外像は映像資料の宝庫であり、この活用のためのデータベース化ができれば、日本文化のあらゆる側面からの研究を支援するものとなろう。

３．データ収集・入力のコストパフォーマンス

現在、文化という形のはっきりしないものを扱う手段には、決定的と考えられる定型がまだない。データベースを構築し検索に利用することもかなり行われているが、文化研究にもっぱら用いられているデータベースは、古典文学の作品を全文データベース化したものが多い。これは、第一には、データの収集の見通しについて、網羅性が確実に保証され、また、集められたデータの一貫性もほぼ確実に保証できるからである。つまり、古典文学は、代表的と考えられるものはすべて網羅的に把握されており、テキストで出版されてもいるし、データの揺れと考えられる各種の校異についても、その種の過去の研究がいくつかの論文・図書のシリーズとしてまとめられていて、収集に大きな労力が必要なく、入力や編成に専門家を全面的に張り付けなくてもよい点がデータベース構築の容易さに大きく貢献している。

また第２には、国文研のデータベースが採用しているようなクイック・インデックスによる検索の有効性がある程度示されている点も、利用する観点からの重要な評価対象である。

本発表における外像データベースは、第１の観点のうち、データ収集の網羅性について、２．２節に述べたように全量をしぼることで量的な把握が可能な段階にしており、さらに次のような見通しをもって具体的な収集を考えている。

映像に含まれる対象の客観性という観点に立つと、写真が最も客観性が高い。写真は、幕末期に日本に入り、明治３０年頃から爆発的な普及がみられるようになった。われわれは、この写真の普及という現象を考慮して、第１期の外像データベースとして、１９８５年から１９００年の間に出版された日本研究書をできる限り収集し、そこから残らず挿絵を採取入力することにした。

本の挿絵には写真以前は、石版や銅版が使われていた。たとえば、日本のグラフ雑誌の先駆けである『風俗画報』の画像の石版と写真の比率を見ると、表１のようになっている。

表１．『風俗画報』の石版写真比率

記事名	発行年(西暦)	石版	写真
新撰東京名勝図会　上野公園	明治29 1896	17	0
新撰東京名勝図会　麹町区	明治31 1898	14	24
新撰東京名勝図会　深川区	明治42 1909	8	26
大正博覧会	大正3　1914	3	42

１８５０年から１９００年という切りのよい期間は、外像の年間出現数が毎年ほぼ一定という状況にあり、時間的な一様性を偶然ではあるが確保することができる。このことは、情報の取捨選択をしないでデータベース化を行っても、研究の基礎的な資料としての役割を果たすとい

うことであり、手間をかけない入力という点で重要な因子である。１９００年以降については、外像の年間出現数は爆発的に増えているので、資料自身の取捨選択をしなければ、その入力維持コストは膨大なものになるであろう。

第２の検索の有効性という観点からは、検索キーの作成という問題が発生している。現在、画像自身をキーとする検索は、まだ実用の域に達しているとはいえず、これからの研究に大きく期待している。現状は、絵の対象が何であるのかを示したテキストをキーとするのが最も普遍的な方法である。単独の画像では対象が何であるかを示すことはほとんどないが、本の挿絵の場合はタイトルがあるのが普通である。キーの設定に専門家の手をかけなくて済むのは、大量のデータ入力にとってコストダウンが図れ、大きなメリットである。さらに、写真からは判別できない情報が含まれていることも大きなメリットである（図2-a,bのような現在は失われてしまった被写体の名前や、図2-cのタイトルから、積んでいる俵の中身がタバコの葉であることが判明することなどが例である。）

その他のキーとして、収容されていた本の書誌情報が、これも少ないコストで入れられる。書誌の検索とリンクして外像の検索を行うことにより、たとえば、その映像を観光目的でとったのか学術調査だったのかなどを区別できる可能性が生まれる。

最終的な検索は利用者自身の目による必要があり、精細な画像だけではなく精度を落とした縮小画像を次々と表示するといった機能を用意する予定である。縮小画像を作成する際、原画像が石版や銅版のエッチング（図2-a,e,f）であるか、写真（図2-b,c）であるか、彩色された絵（図2-d）であるかなどによって、縮小のアルゴリズムを多少修正しなければならない。この詳細については、稿を改めて発表したい。

４．研究の資料としての外像

日本の個々の文化事象のルーツを探ると、かなり新しいと考えられるものでも江戸時代にさかのぼるといわれている。また、明治維新は文化的にも大変革点であったことは周知のとおりである。今回データベース構築の範囲とする１８５０年から１９００年という期間が、明治維新の前後をカバーし、文化の経年変化を追うことをも可能にしている点にも注目したい。ただし、この期間だけでは当然変化が網羅されるわけではない。外像のいくつかから外挿される時代の異なる画像を新たに選択付加することによって、その文化事象の変化を追う研究が可能になる。つまり、研究の入口点を提供するデータベースという性格を持たせることができるのである。（この際つけ加える映像は、それを必要とする研究者の取捨選択を経るものであり、この基本外像データベースとは多少性格を異とするものとなろう。コストをかけて作成する価値はその研究者の判断によることになる。）ことばを変えていうならば、このデータベースは総括的な日本イメージ・データベースの核になるべきものであると考えているのである。

日本を外国人によりわかりやすく伝えるために利用された映像には、われわれ日本人からみて、意外な見落としや誤解がある。たとえば、中国の年中行事を日本のそれと解説して掲げていることもある。桜田門外の変を描いた図を、赤穂浪士の討入りとして掲げている本がある。これらは、外国人の誤解の例である。

鎖国時代の日本については必然的に想像図が多いのは当然であろう。しかし、突拍子もない想像図は開国以降にも現れる。マクファーレンの『日本』（1852年）にある「日本庭園」と題する挿絵（図2-e）をみると、とても日本のものとは思えない。実はこの著者は日本に来たこと

がないのにこの本を書いたのであった。これを見ると、たいていの日本人は中国風であると感じる。この絵を「外国人は日本が中国の一部の同質のものであると感じられた／思いこんでいる」証拠として出すこともあるであろうし、逆に、「日本と書いてあるにもかかわらず、どうして／どこが日本のものでない（あるいは中国である）と判断させたか」を研究する対象としてとりあげることもあるであろう。

挿絵の中には、日本の絵・版画をそのままのせたものがある。特に北斎漫画は、開国初期に来日した外国人に大変な人気を呼んだ。日本の生活・風習がエキゾチシズムを刺激する形で誇張されている点が注目されたのであろう。ところで、元は日本人の手で描かれた画像ではあるが、これらも外像と考えるべきである。そこには本の著者の引用の意志がある。たとえば、着物姿の女性が手枕で横になっている絵（図2-f）を掲げて、外人教師であったグリフィスが書いた『皇国』（1876年）では「日本人のフィエスタ＝昼寝」と解説し、駐日英国公使オールコックの書いた『大君の都』（1963年）では「日本人はどのように眠るか」と解説している。また、同じ北斎漫画の絵で、水桶を運ぶ女の絵を前者は「旅人の足を洗う水を運ぶ」、後者は「下女」とし、荷車と人足の絵を前者は「横浜の荷車」、後者は「江戸市中の商業活動」としている。これらは、同じ絵を見て違う解釈がなされた例である。われわれにとっては自明の日本文化も誤解されることがあり、また見る目がちがえば、ちがう解釈がなりたつという点において、それ自体外国人の日本イメージの研究にとってはきわめて重要な研究対象となる。この点は、文化の誤解・異なる解釈という「日本イメージ」研究の大事な資料と考えねばならない。

5．　おわりに

外像データベースは書物の文脈から映像を解放したものであるという初期の目標も達成されている。日本イメージを研究する研究者自身が、著者の視点から離れて、何か新しい視点の研究を得られるようなものになるはずである。そのささやかな例として図３に富士山をタイトルとしてあげた外像を６枚のせてある。写真であるaとbに比べると、スケッチを元にしたcとdに高さの誇張があるのが見て取れるであろう（成立年代から見ると、dはcを参考にした可能性があるが）。

本データベースは、日本文化とか日本イメージといった正確には言葉で記述し尽くせない対象を、映像として収集するという試みである。収集する全体を規定するには、何らかの基準を付加して網羅性を保証する必要があり、現実に存在するものという物理的な制約に加えて、外国人の日本研究者が挿絵に使っているという基準を加えて、日本イメージを代表する／説明する映像であるというフィルタリングを行っている。いまだ準備段階であるが、完成後にその研究上の成果として予想されるいくつかを解説した。

文献

Alcock:"The Capital of the Tycoon", 1863. 図2-f,図3-f.

Dickson:"Japan being a sketch of the history, government and officers of the Empire", 1869. 図3-c

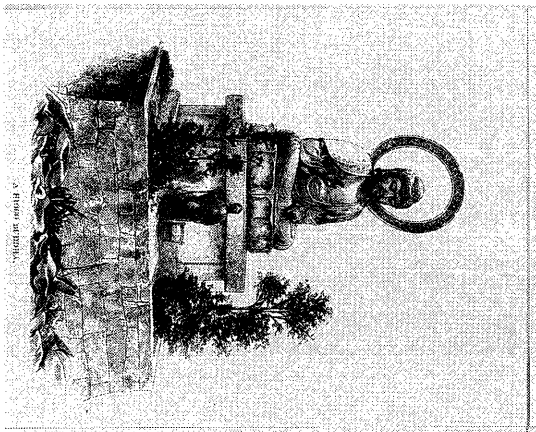
Bird:"Unbeaten Tracks in Japan", 1880. 図2-a,図3-d.

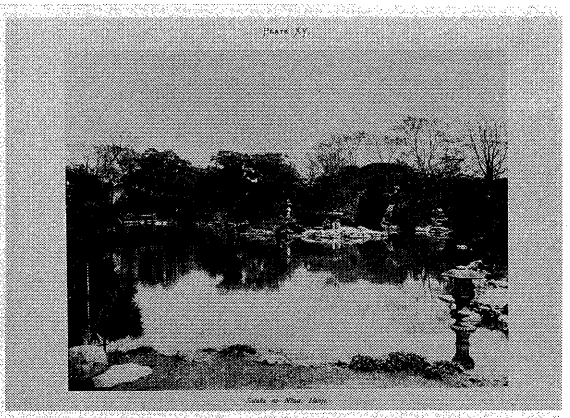
Cotteau: "Un Touriste dans Léxtreme Orient", 1884. 図3-e.

Weston:"Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps", 1896. 図3-b.

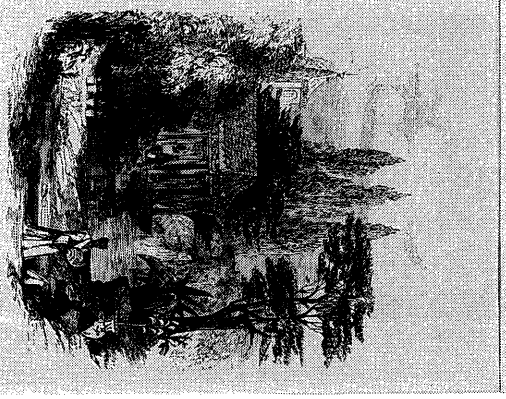
Taylor:"Vacation Days in Hawaii and Japan", 1898. 図2-c, 図3-a.

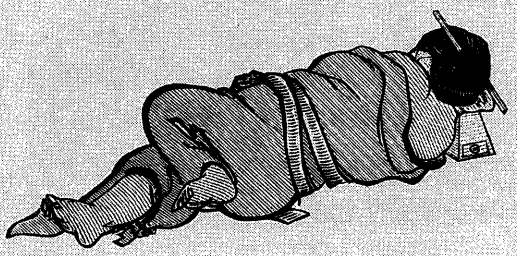
図2　各種の外像
（図の下位番号は左から右にab、下にcd、efと続く）





NOW AND THEN WE MEET A CART LADEN WITH TOBACCO AND DRAWN BY A BULL.



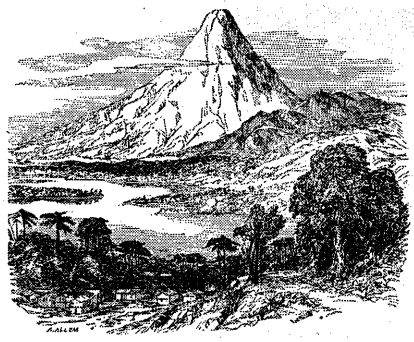


HOW THE JAPANESE SLEEP

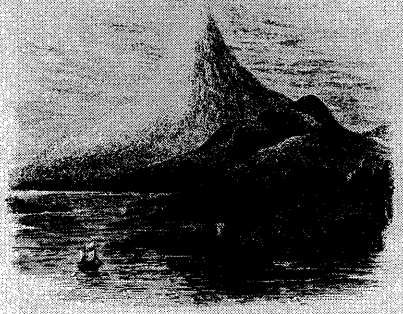
図3　富士山をタイトルに持つ外像
（図の下位番号は左から右にab、下にcd、efと続く）

FUJI-YAMA IN ALL THE GLORY OF ITS MAJESTIC HEIGHT.

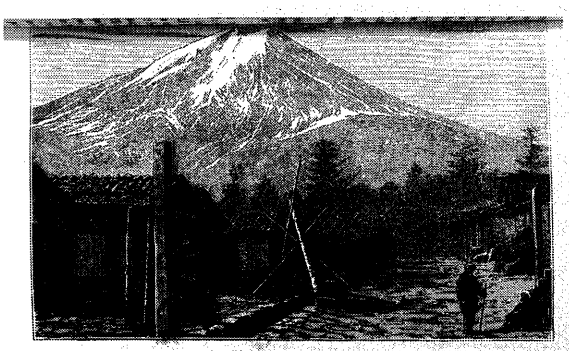
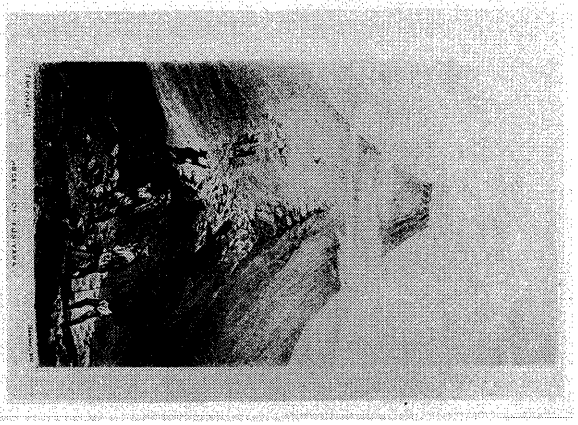
FUJI-SAN, WITH CLOUD CAP, FROM THE SOUTH-WEST.



THE FUDSI-JAMMA.



FUJISAN.



Le Fouji-yama.